

[普及事項]

新技術名：本田薬剤散布後に畦畔の草刈りを行うことで水稻登熟後期におけるアカスジカスミカメの発生を抑制できる（平成24～26年）

研究機関名 農業試験場 生産環境部病害虫担当  
担当者 高橋良知・菊池英樹

[要約] 本田薬剤散布7日後までに畦畔の草刈りを行うと登熟後期の畦畔におけるイネ科雑草の出穂割合が低くなり宿主が少なくなるため、アカスジカスミカメの発生量を抑制できる。水田内での本種の発生量も少なくなり、側部加害を主体とした斑点米発生量を低減することができる。

[普及対象範囲]

県内全域

[ねらい]

斑点米カメムシ類の主要種は、近年アカスジカスミカメに変化している。本種は、登熟後期まで水田内で発生が確認される場合が多い。本研究では稲の出穂期10日後頃の本田防除を前提とした場合に、8月以降の畦畔の草刈りにより効率的にアカスジカスミカメによる斑点米被害を抑制する防除体系について検討を行う。

[技術の内容・特徴]

1. 放虫試験（畦畔の草刈りにより水田内にアカスジカスミカメが追い込まれた状況）において、薬剤散布7日後までの斑点米混入率が少ないことから、この時期までの畦畔の草刈りが有効であると考えられた（図1）。
2. 薬剤散布後に畦畔の草刈りを行うと、8月下旬以降畦畔におけるカメムシの発生を抑制できる（図2）。畦畔の草刈りを行ったほ場では、8月下旬の畦畔におけるイネ科雑草の出穂割合は極めて低い（図3）。
3. 畦畔の草刈りにより本種の水田内での発生量も少なくなり、側部加害を主体とした斑点米被害を減少させることができる（図4、5）。

[成果の活用上の留意点]

1. 畦畔以外の本種の発生源対策として、ホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエ等の水田内雑草の発生を防ぐことが重要である。
2. いずれの試験も品種は「あきたこまち」を用いている。

[具体的なデータ等]

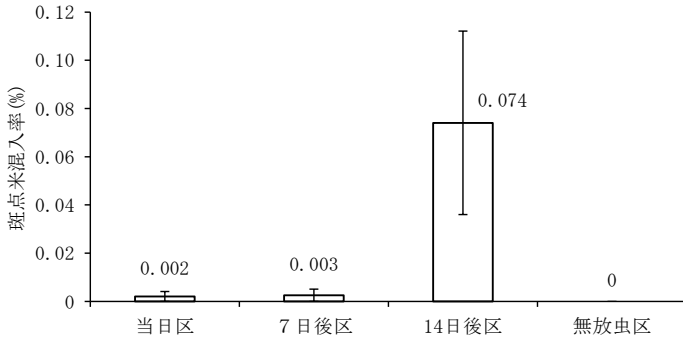


図1 薬剤散布後経過日数別の斑点米混入率 (2013年調査)

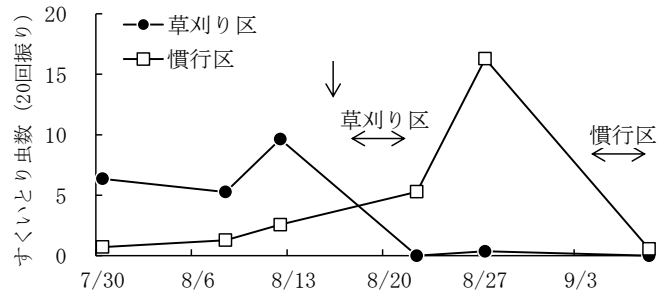


図2 畦畔におけるカスミカメムシ類の発生推移 (2014年調査)

↓: 薬剤散布、⇔: 草刈り時期を示す。

水田にジノテフラン液剤1,000倍液を散布し、縦100×横100×高さ150cmの網枠を設置した。薬剤散布後の経過日数毎に網枠の中にアカスジ成虫雌雄各2頭を放虫し、斑点米混入率を調査した。

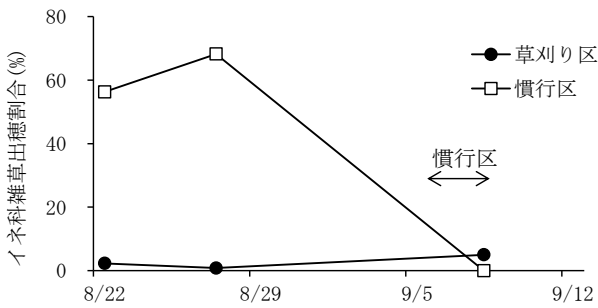


図3 畦畔におけるイネ科雑草の出穂割合の推移 (2014年調査)  
⇔: 草刈り時期を示す。

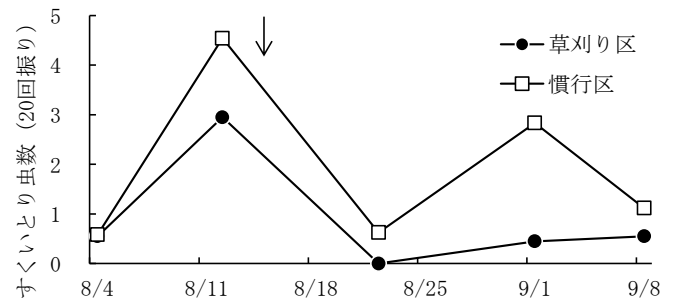


図4 水田内におけるカスミカメムシ類の発生推移 (2014年調査)

↓: 薬剤散布を示す。

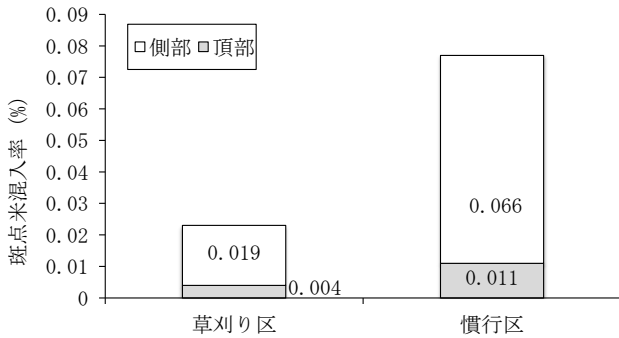


図5 加害部位別斑点米混入率

図2-5における各区の試験概要  
 試験地：大仙市高梨、品種「あきたこまち」  
 出穂期：8/3, 出穂期13日後にジノテフラン液剤を散布  
 草刈り区：薬剤散布2～5日後に畦畔の草刈り実施  
 慣行区：8月は畦畔の草刈りを実施せず、9月6～8日に草刈り実施

[発表論文等]

・本田薬剤散布後の畦畔草刈り方法については平成27年度版農作物病害虫・雑草防除基準に記載している。